

## 観音物語(4)念の力

が い によりやく せつ      もんみよぎゆうけんしん      しんねん ふくう か      のうめつしょう く  
我為汝略説      聞名及見身      心念不空過      能滅諸有苦

ほぼ  
我れ汝が為に略説かん 名を聞き及び身を見 心に念じて空しく過ぎざれば 能く諸の有の苦を滅したまう

今日は国王の誕生日である。釈迦牟尼仏は国王生誕のために仏法を民衆に説くように招請された。参加者八万四千の祝賀会である。その中に死刑待機中の男女八名が交じっている。彼らには式典の主要な役目があり、仏法を聞かせるために拘置所から護送されてきた。

刑務官が死刑囚の掌に一枚の白い皿を載せ、黄金色の油をなみなみと注いだ。灯明の菜種油である。

「この油を一滴もこぼすことなく、釈迦牟尼仏に献じることができれば、死刑を免除する」

法務大臣が会場で告知した。この奇妙な献灯式は、国王の恩赦として公開することになった。

主役の丸坊主は、満杯の油の皿を掌に載せて縦二列になった。八名は油を運ぶ恐ろしさに身震いしている。

鐘が鳴る。灯明を檀上へ奉奠する合図である。献灯式は会場入口から始まった。丸坊主は油の揺れに細心の注意をはらいながら、器を水平に保って世尊へ歩み始めた。一心不乱である。油がかすかに揺れる。本気も本気、一步、一步、慎重に足を運んでいる。

念じるという行為は自分自身のことである。うわのそらでは念じることにはならない。なぜならば、「念」という漢字は「今」と「心」の合成文字である。つまり、観音さまを拝んでいる今の心が、観音さまに届く。今の念が一番勝負である。

世尊は、「一心に観世音菩薩を念じる」という大切さを大衆に理解させるために、献灯の油を零さないように運ぶという奇妙な儀式を提案したのである。国王はこれを承認し、大臣が儀式の次第を練って今日の披露になった。

世尊に届くまでにはかなりの距離がある。見物人はまるで自分のことのように、首をのり出した。無事に果たされることを願って、八万四千の心が一になった。殺害を受けた家族たちは目を真っ赤にはらしている。その被害者家族の隣に観音菩薩が坐っているが、家族は菩薩の存在にまだ気づいていない。

どこからともなく、観音力を頼む声が漏れ始めた。静かで低めの厳かな声である。無事に運ばれることを願って、会場が「ナム カンゼオンボーサ」の称名でつつまれた。仏菩薩をはじめ、弟子も、国王も、大臣も、将軍も、長者も、婆羅門も、比丘も、比丘尼も、信者も、婦人も、児童も、天龍も、夜叉も、ゆっくりと唱和している。響きはやわらかい。大勢でありながら、声がみごとに揃っている。しかし、被害者家族は口をつぐんだまま睨みつけている。

正面に端座する世尊は、ひときわ映徹に輝き、触地印のまま微動だにもしない。

観音菩薩がにわかに座坪から立ちあがった。そして、握っていた蓮の花束を空中に勢いよく投げた。

花びらが、金と紅と白が混じりながら空中に舞い乱れる。表と裏を翻しながら漂っている。

花びらは、油を運ぶ通路に一葉、そして一葉、ゆっくりと散っている。

男の右肩に一葉、女の油の表面に一葉……。

この光景に驚いた被害者家族は、隣が観音菩薩であったことに気づき、感涙の合掌をした。菩薩も呼応した。このとき、家族は忽然と悟った。憎しみが静かに去っていくのを感じる。清々しさがこみあげてくる。涙ながら菩薩に耳打ちをした。「いつまでも亡き人を悲しんでいては冥福になりません。このままでは、私たちの人生も暗闇です。今日より憎しみを消し去ります。油をこぼさぬように明るく歩んでまいります。観音さま、本当にありがとうございました」

菩薩は頷いて、ふたたび相互が合掌をした。

世尊に油をこぼさずに届けることができたのは三名である。そして、油の皿を正面檀上に安置した。会場から熱い拍手が湧いた。三つの頭が地面をこすりつけた。不覚の五名はその横に立ち並び、これまでになくさっぱりとした顔で合掌している。この儀式によって処刑への覚悟ができたようだ。頬に細い涙が流れている。

世尊が油に灯芯を添えたとき、天空から火の塊が飛んできた。一帯が急に明るくなり、会場の上空で火炎は吸い込まれるようにして消えていった。丸い火を目撃した人が大勢いる。眩しさは全員が感じた。真昼の流星である。

三つの法灯が煌々と輝く。その一段下に、五つの灯明が燃えている。

「観世音菩薩の名前を聞き、その姿を拝み、ひたすら念ずれば、苦悩はたちまちに消えていく」

釈迦牟尼仏は、八つの灯明を背景に、観音力の不可思議な逸話に入った。